

「明日を創る」 頸髄損傷者の生活の記録



上村 数洋 著

奈良 勲/金沢大学医療技術短期大学部 理学療法士

1981年12月、雪のちらつく冬の夜、勤務先から車で帰宅中の上村さんは、峠の下り坂でスリップしてブレーキがきかなくなり谷川に転落、第三頸椎脱臼骨折による四肢麻痺となる。働き盛りの34歳であった。種々の医学的治療・管理を受けながら障害受容の段階を経過し、1983年10月に退院。当初は四畳半の和室に電動 Gatch ベッドと TV だけの生活で、空間が狭くりフターも使えないため、車いすでの外出もままならない状態であった。1984年2月に呼吸センサーによる環境制御装置を導入されて一部の身の ADL が可能になり、上村さんの生活圏拡大への意欲はますます高まってきた。「子育て論文」の募集を見てワーブ

ロで打って応募され、見事入賞された。そして1986年には KB (キーボード)マウス・エミュレーター装置の導入により、口にくわえた電子ペンで文章を書いたり、絵や図を描けるまでになった。この本や『作業療法ジャーナル』の表紙を飾る絵がその芸術作品である。上村さんは精神的にやっと自立した自分を振り返り、娘さんの存在、奥さんの援助、そして両親に遅しく育ててもらえたことを感謝されている。

上記の内容は1章の「事故、受傷、そして生活をつくる日々へ」の概要である。第2章「障害と共に生きる私のライフスタイル」として、セルフケアと健康管理の実際を、第3章「私の手足として活

躍する機器」として、実際に使用されている機器などを写真・イラストをふんだんに活用して紹介されている。第三者的解説ではなく、当事者の表現だけに説得力がある。第4章は「存宅生活をより楽しくするために」として、生活の心構えや社会資源の活用についての助言がある。「あとがきに代えて」では、奥さんが、限り無い感謝を込めて本書を結んでおられる。

この書評を書くに当たり、情報確認のために上村さんに直接お電話した。本書にも掲載されている環境制御により電話機を通してお話できた。本書をリハビリテーション関連職種はもとより、障害を背負って生きている方々に一読を薦めたい。

(B5判, 132ページ, 定価1700円(税込み), 送料310円, 1990年, 三輪書店刊)